

### モーツァルト：交響曲 第1番

1764年から65年にかけて、9歳頃のモーツァルトが書いたとされる5曲のシンフォニーのうち、現存する4曲のなかの1曲（他は K.16a、K.19、K.19a）。敬愛するクリスチャン・バッハに範をとったと思われる「急～緩～急」のイタリア式三楽章構成。4曲ともテンポ、リズム、内容形式は、ほぼ共通している。すなわち、第1楽章がアレグロ・4/4拍子・ソナタ形式、第2楽章はアンダンテ・2/4拍子・2部形式、第3楽章がプレスト・3/8拍子・ロンドである。弦楽に加わるのはオーボエ、ホルンが2本ずつ。この楽器編成が将来にわたってモーツァルトの交響曲の基礎となっていく。典雅な習作を味わいたい。

### モーツァルト：ピアノ協奏曲 第9番《ジュノーム》

1777年1月、21歳のときの作品。ザルツブルク時代に書かれたピアノ協奏曲のなかで最も高い人気を誇る。パリからザルツブルクを訪れた謎の女流ピアニスト、ジュノーム嬢のために書かれたとされてきたが、近年の研究でピアニストはヴィクトワール・ジュナミと判明した。

第1楽章はソナタ形式のアレグロ。オーケストラの短い呼びかけに答えるかのように、いきなりピアノが登場する。主題の前半を管弦楽が、後半をピアノが奏でて完結させるという、当時としては珍しいスタイルであるが、それも一瞬のことで、管弦楽により型どおりの序奏が奏でられ、大柄で安定感のある音楽が展開される。ピアノのトリルが強調されて、全体が華やかな印象に包まれている。濃い寂莫感が漂う第2楽章はハ短調のソナタ形式。シンプルな旋律を奏でるピアノが美しい。のちの「ヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲」(K.364)にも通じるギャラント様式の到達点である。第3楽章は大規模に拡大されたロンド形式。急速なテンポ（プレスト）で飛び交い、転げ回るようなピアノ・ソロで開始される。中間部には2つのカデンツァが配され、カデンツァに挟まれたかたちで優雅なメヌエットが奏でられる。

### モーツァルト：交響曲 第40番

これほどの名曲であるにもかかわらず、その出自は判然としない。作曲は1788年、32歳の頃とされているが、いつ初演されたのか、なぜ2種類の版が存在するのかは、謎のままである。

ヴィオラが刻む一瞬の序奏にのって、沈痛なモルト・アレグロの第1主題が奏でられる。ケルビーノのアリア「自分で自分がわからない」との類似性が指摘されているテーマだ。展開部では極端な遠隔転調（ト短調→嬰へ短調）が不安感を煽る。ファゴットの瞑想的な響きも印象的。第2楽章はソナタ形式によるシンリエンヌ。優雅というよりは荘厳。3/4拍子の第3楽章は複合三部形式。ト短調の重いメヌエットで始まるが、ト長調のトリオが現れると救われた心持ちになる。終楽章は嵐のようなアレグロ・アッサイ。小声で話し始めても恫喝に遮られるような冒頭から全楽器がトゥッティで吼える。展開部前に聴こえる優しい変ロ長調すら不安げだ。そして、じわじわ追い詰められていくような恐怖感。神童が以前の短調作品で聴かせてくれた魔法のような、喜悦に満ちたどんでん返しのコーダはもはやない。